

Englische Suiten

Johann Sebastian Bach

J.S. バッハ 六つのイギリス組曲より

第 2 番 イ短調 BWV807

プレリュード (*Prélude*)

アルマンド (*Allemande*)

クーラント (*Courante*)

サラバンド、同じサラバンドの装飾
(*Sarabande, Les agréments de la même Sarabande*)

ブーレ I (*Bourrée I*)

ブーレ II (*Bourrée II*)

ジーク (*Gigue*)

解説付き

●イギリス組曲について

「イギリス組曲」は、「フランス組曲」「パルティータ」と共に、バッハの代表的な鍵盤楽器のための組曲です。いつ作曲されたか、正確なところは分かりませんが、「パルティータ」が最も遅くライプツィヒ時代<38～65才>(1723-1750)の作曲。「フランス組曲」と「イギリス組曲」は、ワイマール時代<23～32才>(1708-1717)の終わりからケーテン時代<32～38才>(1717-1723)にかけてまとめられたもので、作曲もその頃と考えられます。「イギリス組曲」は様式的に見て、「フランス組曲」より早い時期、1722年（一説には1715年頃）の作品だろうと言われています。

名称の由来ははっきりしていませんが、「ある高貴なイギリス人のために書かれた」ためにイギリス組曲と呼ばれるようになったなどの説があります。

6つの組曲からなっており、それぞれ6つの曲を持っています。そして、6つの組曲とも「プレリュード」で始まり、そのあと、「アルマンド」「クーラント」「サラバンド」「ジグ」が続き、「サラバンド」と「ジグ」の間に第1番と第2番は「ブーレ」、第3番と第6番では「ガヴォット」、第4番では「メヌエット」、第5番は「パスピエ」が挿入されています。

●第2番 イ短調 BWV807

6つの組曲の中で長調組曲は、第1番と第4番の2曲のみです。他の第2・第3・第5・第6番は短調作品となっています。第2番は、プレリュード - アルマンド - クーラント - 変奏をとまなうサラバンド - 二つのブーレ - ジグ の構成です。

プレリュード (Prélude)

長大な協奏曲的プレリュードから始まっています。この曲は、全体が55小節ずつの三つの部分に分かれます。第3部分は、第1部分の反復となっており、中間に第2部分が置かれています。主題の弾き方は、演奏者により様々です。冒頭の八分音符をノンレガートで演奏

する。 又は、最初の音のみノンレガートで後の2音は

レガートで奏する。 あるいは、その逆で、最初の2音

をレガートで最後のみノンレガートで奏する。

私の楽譜は、アルゲリッチの演奏を参考に表記致しました。それから、対旋律の八分音符の

Englische Suiten

Suite II

Johann Sebastian Bach
BWV 807

Prélude

Allegro

f *meno f* *cresc.* *dim.* *p* *cresc.* *f*